グリムのメルヒェン『唄う骨』(KHM 28) の異質性について

—もうひとつのモティーフ

鶴田涼子

要旨

『唄う骨』KHM 28 *Der singende Knochen* は，殺された者の骨によって真実が明らかとなるお話で，世界中に分布していることが確認されている．これをグリムのメルヒェンのひとつとして意識的に読んでいくと，この話の結末から，読者は安堵感を得ることができるが，どこか切なさを振り切ることができない，という点で，他の多くのグリムのメルヒェンと，読後感が異なることが指摘できる．国の平安のためにイノシシ狩りを求める王，これに名のり出る二人の兄弟，兄弟の確執，真実の証明と遺骨の安置，振り返られることの発端，これらの連鎖する個々のモティーフは，幸せな結末で読者を楽しませるのではなく，どのような悪事も，明るみにでずにはいないことを，読者に教えるものである．獰猛な獣に立ち向かう弟と，それに対置される，ずる賢く生きる兄は，最終的にあるべき姿をとる．この話において，異質な読後感を生み出す源は，グリムのメルヒェンという枠に制限されない，昔語りにある．

はじめに

『唄う骨』*Der singende Knochen* と，タイトルが付されているように，この話では骨がうたう唄によって真実が明るみに出されるお話である．これまで，骨の霊力についての検証や，類話の比較検討から，各国ごとの骨というモティーフの位置づけを試みる考察が中心的に行われてきた．骨は人間の不滅の部分であり，種子の性格をおびるがゆえに，生命のシンボルであり，民間伝承では，人が死んでしまっても，生命と意識は骨の中に残るため，その骨をそっとしておかなければならないとの言い伝えもある．[1]骨のモティーフは，人間の再生を想起させるものとして実に意義深い．しかしながら，このお話を読んでいると，多くの研究において考察から外される，話の前半部分に，話の舞台を反映する面白いエピソードが隠れているように感じられてきた．類話を比較すると，とりわけヴァリエーションが多彩である語り始めの部分に，地理的・歴史的な相違が刻み込まれているものと考えられる．そのため，当考察では，グリムのメルヒェンの『唄う骨』を基盤として，この話の中心的なモティーフである「骨による真実の暴露」とは異なる，もうひとつのモティーフに焦点を当ててみたい．

出自

『唄う骨』 KHM 28 *Der singende Knochen* は，1812 年 1 月 19 日にヴィルヘルム・グリム

(Wilhelm Grimm 1786-1859) が，ドルトヒェン・ヴィルトから聞き取ったお話で，『子どもと家庭のためのメルヒェン集』*Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*（初版第一巻1812年，以下グリムのメルヒェンと記載）の初版から収められている．[2]フィンランドの民俗学者 Antti Aarne により編纂され，アメリカの StithThompson により増補・改訂され，その後ドイツの説話学者 Hans-Jörg Uther によって再度，増補・改訂されたメルヒェンの類型分析（略称 ATU）では，『唄う骨』は，Religious Tales, THE TRUTH COMES TO LIGHT 780 番 The Singing Bone に区分される．The Singing Bone に分類される話の筋は，兄弟もしくは姉妹が，その兄弟もしくは姉妹を殺害し，地面に埋め，羊飼いが骨から楽器（ハープ・ヴァイオリン・フルート）を作り，それがことの真相を明らかにするというものである．[3]この話は，いくつものヴァリエーションを伴って，世界中に分布していると言われる．

アンハッピーエンドの実態

『唄う骨』は，ある国でイノシシ（Wildschwein）が暴れ，人々が困っている状況から始まる．

> Es war einmal in einem Lande große Klage über ein Wildschwein, das den Bauern die Äcker umwühlte, das Vieh tötete und den Menschen mit seinen Hauern den Leib aufriß. (7, S.164)
> むかしある国で，イノシシが大暴れをして，人々をたいへん困らせていた．イノシシは，百姓の畑を掘り返し，家畜を殺し，人間の胴を牙で引き裂くという騒ぎだった．

この状況を見かねたこの国の王は，この災いから国を救ってくれるものがあったら，褒美を与えると約束する．しかし，初めに提示された報酬では，人々は動かなかった．というのも，イノシシは，大きく，強いので，誰も森へ入る勇気を起こすことができなかったからである．そこで王はついに，特別な報酬を約束する．それは，王の一人娘を妻としてつかわすことであった．つまりこれは，将来の国王の座が，その者に譲り渡されることを意味している．

この布告に対して名のり出たのが，貧乏な男のせがれ，二人の兄弟である．兄は悪知恵があり(listig)，抜け目がなく(klug)，高慢さから(aus Hochmut)，弟は無邪気で(unschuldig)，子どものようで(dumm)，人のよさから(aus gutem Herzen)，イノシシを狩ることを試みる．この二人が別べつの道に分かれて進んで行く場面から，話の舞台は森へと移行する．さて，この話で王が求めているのは，イノシシによる被害をこれ以上増やさないことである．国の平和を守るためならば，大切な一人娘を手放す覚悟で，王は布告を出したことになる．この事実に鑑みると，イノシシによる被害の深刻さが想定される．以下，前述の場面以降のあらすじを簡潔に記す．

王の布告に，二人の兄弟が挑む．王の命令により，二人は別べつの方向から森へ入る．その途中，弟は小人から黒い槍をさずかり，その槍でイノシシを難なく倒す．弟がイノシシを担いで，森を抜けようとすると，兄が小屋で陽気に騒いでいる．兄は，イノシシが逃げることはないと思い，まずは契機づけに酒を飲んでいたのだった．ところが，弟がイノシシを担いでいる姿を見る

と，兄は弟を呼び寄せ，一緒に休むように小屋へ誘う．暗くなるまで兄は弟をそこにとどまらせ，暗くなってから，二人は出かける．その帰路で川の橋に差し掛かると，兄は弟に先に行くように言う．橋の真ん中まで来ると兄は，弟をうしろから殴りつけ，川に落として殺す．兄は弟が捕らえたイノシシを我がものにし，王のもとへ行き，自分が仕留めたと嘘をつき，王の娘と結婚する．

歳月が経ち，羊飼いが橋を渡っていたところ，白い小さな骨を見つける．羊飼いがその骨で角笛の吹き口を作り，吹いてみると，小さな骨がひとりでにうたい出す．唄は，兄が自分を殺した事実を知らせるものである．羊飼いはその笛を王のもとへ届ける．唄のこころを理解した王は，橋の下を掘り返させる．すると殺された男の骸骨が出てくる．兄は，白状し，袋の中へ縫いこまれて，生きながら川へ沈められる．弟の遺骨は墓に安置される．

この話は，悪知恵のある兄が弟を殺し，弟の手柄を自分のものにしたことが，弟の骨による唄によって明るみに出るところに面白さがあるのだが，これ以外にも，すでに見たこの話の発端部に時代背景を物語るモティーフが現れていると言えよう．それは王による布告がきっかけで行われることになった「イノシシ狩り」である．

類型

似通った民話が世界中に分布していることに着目したアールネの国際的な類型分析は，後世の民俗・説話研究者に受け継がれ，民間伝承研究の礎を築いた．各民話間における諸特徴の違いの概観や，モティーフの混交と局所的な差異を比較検討する資料を用意したという意味で実に重要である．『唄う骨』がその ATU780 The Singing Bone に分類されているということから考えると，この話の核は，殺された者自身の骨によってことの真相が明らかになるというモティーフにある．そのため，そこに至るまでの前半部分は重要視されていないように思われる．この種のモティーフは，グリムのメルヒェンの中での，『びゃくしんのはなし』KHM47 *Von dem Machandelboom* を連想させる．『びゃくしんのはなし』の場合，殺された者の霊が他の生き物の姿（鳥）を借りて再びこの世に現れるという形で復活が描かれている．ここでは，継子を愛することのできない継母が，継子の首を落とすことにより殺害が行われ，継子の肉は母によって調理された後，父親に食べられる．その際に残された骨を，妹が，びゃくしんの木の下に埋めると，兄は鳥の姿を借りて，この世にやって来る．最後には，継子を殺した継母は，石うすの下敷きになって死に，継子は代わりに命を取り戻すことで，ハッピーエンドになる．

『唄う骨』では，殺された弟が命を取り戻すことはない．悪事を働いた兄は，罰として袋の中へ縫いこまれ，生きながら川へ沈められる．(Der böse Bruder konnte die Tat nicht leugnen, ward in einen Sack genäht und lebendig ersäuft, […]) (7, S.166f.)[4] 一方，殺された男（弟）の遺骨は墓地へ移されて，立派なお墓の中に安置される．(die Gebeine des Gemordeten aber wurden auf den Kirchhof in ein schönes Grab zur Ruhe gelegt.) (7, S.167) 結末において，真実が明るみに出ることは，不公平さが軽減するという意味でよいと判断できる要素ではあるものの，ハッピーエンドとは言いがたい．一時的とはいえ，王の一人娘を妻にするのは悪知恵の働く兄の方である．もっとも，兄は幸

せな生活を十分に送る前に，罰せられるのではあるが．兄に殺害された弟の側から考えると，最終的には真実が明らかにされ，さらにそれによって兄に罰が下ることになるという点では，真実が明らかにならず兄が国を支配し，幸せに生き続けるよりは納得がいくであろうという意味でよかったと判断せざるをえない．しかしながら，弟が失ったものはあまりに大きすぎる．最終的に，弟に立派な墓が用意され，その中に遺骨が安置されたとはいえ，弟の命が報われたとは思われない．

アンドレ・ヨレスは，「事の運びが素朴な道徳の要求に完全に一致する形式」をメルヒェンと呼ぶ．[5]『唄う骨』では，そのような形式も，またグリムのメルヒェンに多く見られる未来につながるハッピーエンドも描かれていない．『唄う骨』は，土着的な状態，採集された状態を保持しているのだろうか．集められたお話は，グリム兄弟によって推敲されることで，彼ら独自の色彩が付与された，グリムのメルヒェンへと作り上げられていった．だが，全 201 話の中には，ハッピーエンドへと書き換えることはあまりにも核を変更してしまうことになりかねない，とグリム兄弟が判断したものもあるのではないだろうか．グリム兄弟の加筆変更によって，蒐集されたお話は，ハッピーエンドへと変更されていく可能性もあったが，『唄う骨』においては，事実，初版から収められて以来，そこまでの変更はなされていない．

『唄う骨』に関する加筆変更

あらすじで記載した内容は，グリムのメルヒェン第二版（1819 年）以降の，兄弟の人数が変更されているヴァージョンである．初版の時点では兄弟は三人で，年長の二人が協力して下の弟を殺すことになっている．それは，財産を手にし，将来的には国を治めるという野望を実現するためである．その際，最年長の兄はずる賢く利口で，二番目の兄は並みの頭，三番目は無邪気で頭が足らなかったと描かれている．(Nun waren in dem Königsreich drei Brüder, davon war der älteste listig und klug, der zweite von gewöhnlichem Verstand, der dritte und jüngste aber war unschuldig und dumm.)(1, S.129) このヴァージョンでは，最年長の兄が王の姫と結婚する．真実が明らかになると，最年長の兄とともに二番目の兄も同様に水の中に投げ込まれる．ただし，それによって二人が罰として殺されたかどうかは明示されていない．初版における兄弟設定は，次に紹介するハンガリーの話と共通している．権力闘争という観点から言えば，ロートリンゲンで採話された類話との比較が可能であろう．ロートリンゲンの話では，男の子と女の子の間で，国の支配権をめぐって争いが繰り広げられる．[6]

類話の比較検討

『唄う骨』のように，殺された者の骨が真実を伝えるという話の類話は多い．グリムのメルヒェンの話と実によく似ているものが，先に触れたハンガリーのお話である．

ハンガリーで採話されたヴァージョンでは，王が飼っていたイノシシが逃げ出したというので，

三人兄弟がイノシシを捕まえるために出かける．三人は途中，ひとりの男と出会う．二人の兄は男を相手にしないが，三男は，ことのいきさつを詳しく話し，親切にする．三男はこの男から縄をもらい，イノシシの捕まえ方を教わるので，イノシシを捕まえることに成功する．二人の兄は，一番下の弟がイノシシを捕らえたことを妬ましく思い，弟を木の下に生き埋めにする．年長の男は，まるで自分がイノシシを捕まえたかのように王の前へ差し出し，王の娘と結婚する．ある時，羊飼いが群れを追い立てていたとき，バグパイプが折れたので新しく作ろうと，切り株でバグパイプを作る．羊飼いがバグパイプを吹くと，兄たちの悪事を告げる唄がうたわれ，ことの真相が明らかになる．木の下を掘ると，そこに弟が生きたまま埋まっている．悪事を働いた兄二人は牢屋に入れられ，イノシシを捕まえた弟は王の娘と結婚し，ハッピーエンドとなる．[7]

この話で『唄う骨』と大きく異なるのは弟が生きていること，またそれゆえに王の娘と弟との結婚という形で幸せな結末が描かれることである．補足として，兄たちは殺されずに終わるという点も異なっている．ハンガリーの類話と比較すると，『唄う骨』での悲劇的な結末が浮き彫りになる．とりわけ，弟も兄も最終的には死んでしまう形で話が終結する点が大きく異なる．

『唄う骨』の場合

さて，先に，『唄う骨』は，グリムのメルヒェンとは異色の，より土着的な状態の説話ではないか，と言及した．そのように考えうる理由は，類型では重視されない話の語り始めにあると考える．ハンガリーの話では，王が飼っていた雄のイノシシが逃げ出し，被害を与えている情況がまず説明される．他の話ではイノシシがことの発端というわけではない．例えば日本では，ならず者の仲間入りをした稼ぎのない男が，金銭を目当てに悪心を起こし，働き者で稼ぎの多い男を殺害する例（『骸骨の骨』岩手県上閉伊郡[8]）や，両親に死なれ，叔父のもとで羊の番をしている男の子が，ある日オオカミに，羊かお前のどちらかを食べる，と言われ，叔父にどちらがよいかと問うとお前に決まっている，と言われたので，このことをオオカミに告げ，そのとおり食べられて死んでしまう例（『笛を吹く骨』パンジャブ[9]）などがある．グリムのメルヒェンに収められている話を分析する際，他の類話と共通する部分に着目すると同時に，共通部分以外により一層注目する必要があるだろう．『唄う骨』の場合，初めにイノシシの脅威から人々を守り，国の平和を取り戻すことのできる勇者が求められ，これによる報酬への嫉妬が発端で弟は兄に殺されることになるという点をおさえておかなければならない．

イノシシ狩り

それではまず，王が敵視するイノシシの存在について見ていきたい．イノシシは，北欧神話では「森の騎士」と呼ばれていた．中世では，王や君主への貢物として贈られていたとされる．それはおそらく，イノシシをしとめることが，勇気と力強さを証明する働きを担ったためである．イノシシを授けられた王や君主は，その行為を自分たちへの忠誠ととることができた．イノシシ

は，恐ろしい獣であり，その恐ろしさはイノシシを高貴な獲物と呼ぶ理由へと繋がっている．

またその一方で，イノシシに立ち向かうことは，食料の獲得を目的とする以外に，ひとつの儀式であったとされる．イノシシ Wildschwein とブタ Schwein は，この言葉からも明白なように，親戚関係にある．中世の農村や若干の都市では，人間は動物と雑居していたとされる．そのために，両者間では事故が起こることも多かった．人間は，ブタを恐れていた．森でイノシシに会えば，命はないと考えらたことも想像に難くない．それは次の言及からも伺える．

> 当時のブタは，まだイノシシにちかい，牙のはえた黒ブタで，相当獰猛であったし，とりわけ，一種の狂犬病にかかって狂操状態にあるときは，おそるべき猛獣と化し，女子供に襲いかかって殺傷することは，十分ありえた．こんな獣が所狭しと街や村を走りまわっていたら，事故がおきないほうが不思議だ．[10]

このように，イノシシは操作のきかない獣と見られる．『唄う骨』では，人々がイノシシを警戒している様子がまず描かれていることに気付く．しかし単純にイノシシと人間の関係性と言っても，農民と貴族とでは，イノシシなどの森の獣との付き合い方に大きな隔たりがある．実際の社会に目を向けてみると，農民にとってイノシシは生活の糧を台無しにするため，大敵である．

> 森のなかに人間がはいり込み，動物を狩るのは，もともと農民にとっては家畜や人間や穀物をねらって虎視眈々としている獣，つまり，ヒツジを襲うオオカミや穀物倉庫に忍び込むネズミ，ニワトリをさらうキツネやイタチ，苗にかじりつくイノシシやシカ，などにたいする自衛行為であり，ナイフや鉞をうった棒といった原始的な武器でおこなわれていた[11]．

イノシシを殺すことと自分たちの命を維持することは表裏一体であることがうかがえる．他方，貴族は気晴らしとして戦争にかわるものを求めたようで，事情は大きく異なっていた．つまり，「ヨーロッパでは，10 世紀以降，狩りはますます貴族の特権的活動となっていった．(…) 戦士の特権である武器の所有が，狩りを彼らの占有物にした」のである[12]．貴族としての徴を保持するための狩りの意義を，次の記述が証明する．

> それ［狩り：引用者］は，土地の知識，武器のあつかいの巧みさ，(…) 獰猛な獣にたいするときの勇気，これらをためし涵養するがゆえに，かれらの間で戦士の鍛錬として重んじられた．さらに狩りは，貴族が農民に対して社会的優越を誇示する絶好の機会でもあった．[13]

イノシシ狩りは，狩りのなかでも古代や中世初期を通じて受け継がれてきた格の高い狩りであり，古代において，格が高いとされるのは，ギリシア人・ローマ人・ゲルマン人・ケルト人にとって

も同様であったようである．この時，イノシシに立ち向かう勇気は，英雄として賞賛された．しかしながら，12世紀からイノシシ狩りは貴族の間であまり行われなくなる．[14]

イノシシの奪還と狩りを描くこと

『唄う骨』では，イノシシの捕獲を成し遂げた者は勇者として認められ，後には国を治める王となることが保証される．ただ，国を守る行為として捉えられている「イノシシ狩り」は，先に示したように，いつ，どこでも見られるわけではない．「イノシシとイノシシ狩りの礼賛は，中世初期を通じて盛んに行われ，とりわけゲルマン系の諸地方でその傾向が顕著であり，そのような状況は，考古学，地名学，法律，聖人伝などで確かめられる」．[15]こうした事情の名残として，ドイツの地名には，現在も雄のイノシシ Eber が含まれているところ(Eberbach や Ebersberg など)がある．

十三，十四世紀のフランスでは，高貴なる獣，王の獲物はイノシシではなく，シカへと変更される．王によるシカ狩りは，グリムのメルヒェンの中の，『小さな男の子と女の子』KHM11 Brüderchen und Schwesterchen などに描かれている．[16]ここで王は娯楽としてシカ狩りを行っている．十四世紀の狩猟に関する著作を紐解くと，シカ狩りこそ最も高貴な狩りであるとする言説が特に多く残されていることに気づく．これに対して『唄う骨』では，イノシシを退治する行為が，結果的に姫の婿選びへと繋がっていく点で，森の王者としてのイノシシが恐れられていた社会生活が基盤となっているものと推測される．したがって，『唄う骨』が作られたのは，イノシシを倒したものが勇敢とされる時代であり，イノシシの狩りを描くことがよしとされる時代であったという歴史的背景を読み取ることが可能である．獰猛で恐ろしい獣が他にも存在する中で，イノシシが取り上げられていることは，単なる偶然ではない．[17]それは，教会や聖職者における獣の象徴性と密にかかわる問題である．ラテン文字による古典古代の語義がそのまま受け継がれたため，イノシシは，血気にはやる，激情的な，雷のような，怒り狂った，粗暴な，と形容され，「不純にして恐るべき獣，(...) 神に反抗する罪人のイメージ」[18]が付与されるに至ったのである．これによってイノシシは，いつしか悪魔の化身とされた．イノシシの負の側面が，平穏を乱す悪い存在に対抗する主人公の，勇者としての正の面を効果的に浮き立たせていると言えよう．

その後，十七世紀，十八世紀に入ると，「狩り」というもの自体をめぐる新たな問題性が生じてくる．それはある意味で，文明化されていく社会とそこに住まう人々のメンタリティにおいて，自ずと，人間と動物との関係性が見直されるようになったことと関連している．さらには書物による教育の場が次第に増加したことに伴い，「狩り」を語ること，描くことによる読み手への悪影響が懸念されるようになると，いかなる形式をとっても，動物を殺害する人間の精神性を批判的に見つめる意見が多く挙がるようになる．そうした意識は，毎日の生活の中だけで広まったのではなく，精神性を作り出すひとつの契機となる，読み物全般に注がれていった．

> 十七世紀後半，いくつかのドイツの州では，牛責め好きの老錬な地方議員と論争することなく立法できた独裁君主の布告によって，動物の虐待が処罰されるようになった．（…）あらゆる社会階級のイギリス人は動物にやさしくするように，文学作品ばかりでなく，もっと一般的な安価な版画や，説教，童謡などのメディアを通じて熱心に説かれた．[19]

同じ頃，動物愛護の精神をもつべきであると説くロックの影響が広まりを見せ，教育の現場に決定的な影響を生む．『教育論』*Some thoughts concerning education*（1693）の中で，ロックは，「人は幼年時代からすべての生き物に対してやさしく，決して傷つけたり殺したりしないような習慣をつけなければならない，と私はほんとうにそう思うのである」と自説を述べている．[20]十七世紀中期，子供向けの書籍は，こうしたロックの見解を受け，さらに次のような事態へと進む．

> それ以降十八世紀を通して子供用の本は着実に普及したが，馬から蝿にいたるあらゆる動物にやさしく，いじめている悪い子たちの手から救うよう読者に促した．これらの子供の本はまた，大人による動物虐待も非難した．非人道的屠殺や，生体解剖，そして狩猟をも．[21]（強調引用者）

これは人間が，日常生活で動物に脅かされる状況が減少し，動物よりも人間が優位となり，人間が動物を管理できる時代が来たことを伝える事例であると見てよいだろう．同時に，人間が生存するために必要に迫られて行う，原始的な狩りというものが姿を消していったことを示している．

先の引用内にあるように，グリムのメルヒェンにおいても，「残酷性」を理由に改編過程で削除されるか，もしくは残酷な部分の表現が和らげられたものがある．『子どもたちが屠殺ごっこをした話』KHM22 *Wie Kinder schlachtens mit einander gespielt haben* は，初版に収録され，その後削除された．子どもたちへの悪影響を考えた，教育的な配慮からの変更である．『唄う骨』では，イノシシを狩るというモティーフ自体は削除されずに継続して用いられている．当然，「屠殺」と「狩り」を不用意に並列的に捉えることはできない．しかし，最終的に行き着くところは，人間の生存を支える術という枠内である．先の引用を重んじれば，人間による動物への加害行為として，双方を同一線上に位置づけることが許されるだろう．『唄う骨』において狩りは，「人々の生活を脅かすもの」から国を守るために求められている行為であり，それをやめることを選択する余地は，人間には残されていない．だが，先に引用した十七世紀以降の精神性が，この話から全く感じられないわけではない．それは王の布告の中に見つけられる．初版では，報酬を与える対象を，「イノシシを射抜いた者」としているのに対し，第七版では，「イノシシを生け捕りにするか，殺した者」へと変更されているということは，わずかながらも，グリム兄弟が，獣を殺すという発言に，読者にむけての不安要素を少なからず抱いていたためではないだろうか．[22]

メルヒェンのジャンル

『唄う骨』において，現実離れしたメルヒェンの要素は少ない．話の前半部分で小人が登場し，小人は弟に黒い槍を与え，難なくイノシシを射止めさせるが，超自然的な力によって，何かが現れ，死者が生き返るなどといった，魔法昔話に分類される要素はこの話にはないことは明白である．

メルヒェンの構造やメルヒェンにおける主体の捉え方を考察する中で，タチヤーナ・イェッシュは，『唄う骨』における「魔法昔話」としての要素の欠如を指摘する．ここで引き合いにだされるのは，プロップが用いた意味での「魔法昔話」という概念である．イェッシュは，『唄う骨』と「魔法昔話」の構造を比較検討すると，構造上，欠如していると判断されるのは一点のみであるとする．[23]ここでプロップによる上記の概念を確認しておかねばならない．ロシアの形態学者，ウラジーミル・プロップは，『昔話の形態学』*Morphologie des Märchens*（初版ロシア 1928，ドイツ 1972）において，魔法昔話のみを研究対象とした．その際に，魔法昔話の概念として念頭においていた規定を，後に出版された『魔法昔話の起源』*Die historischen Wurzeln des Zaubermärchens*（初版ロシア 1946，ドイツ 1972，ドイツ 1987）の中で，振り返り，再度言及している．プロップに拠る「魔法昔話」の定義は以下のようである．

> ①何らかの損害ないし不利益（誘拐，追放等）を与えることから，または何かを手に入れたいという願望（…）からはじまって，②主人公が家を出，彼に呪的手段を与える贈与者，または求める物を見つけだすのを手伝ってくれる援助者との出会いをへて展開していく昔話のジャンル（…）
> ③さらに敵との決闘（…），帰還，追跡と進む．この構成は入り組んでいることが多い．④兄弟たちが家に向かっている主人公を穴につきおとす．⑤その後彼は再びもどり，難題による試練を受け，自分の国または舅の国で王位につき，結婚する．これがきわめて多くの，多様な筋の根底にある構成上の要点の概略である．この図式を反映している昔話がここでいう魔法昔話であり，われわれの研究対象である．（強調引用者，番号は，便宜上，引用者が付したものである．）[24]

この定義と『唄う骨』を比較すると，確かにタチヤーナの指摘どおり，⑤の一点を除いて，魔法昔話の図式に一致する．①イノシシの脅威から国を守ろうとする目的から始まり，②弟は小人から黒い槍をもらう．③イノシシとの一騎打ちをし，難なく勝利する．④帰路で兄と会い，弟は殺される．これ以降は，先の図式に合わない．クライマックスの部分が完全に抜け落ちている形で終結している．つまり，「『唄う骨』というメルヒェンの中では，殺害された主人公に，例えば通常の復活が与えられないまま，主人公は名誉ある埋葬に甘んじなければならない」のである[25]．このメルヒェンでは，欲を満たすという，締めくくりの機能を欠いているが，それ以外は魔法昔話のプロップが定義する構造に適合すると言えよう．[26]

『メルヒェン事典』*Das Märchen Lexikon* を参照すると，ヴァルター・シェルフは，『唄う骨』の類話を，Zaubermärchen と読んでいる．その背景には，「殺された者に由来する楽器の魔法へ

の絶対的な信仰」[27]があるとされる．しかしながら当考察では，『唄う骨』が，魔法昔話に分類されうるか否かという問題そのものを取り扱うことが目的ではない．そもそもこうした問いかけ自体が成立するものであるかといった懸念もある．当考察で焦点を当てるのは，グリムのメルヒェンにおける『唄う骨』の特異性であるという点を再び強調したうえで，『唄う骨』が魔法昔話の構造をもっていながらにして，グリムのメルヒェンとしては異質な読後感を起こさせる要因を探ることにしよう．

出発点を振り返る

『唄う骨』で，羊飼いに拾われた骨は，笛の吹き口となって，ここで再び生命力を与えられる．羊飼いが笛を吹くと，笛はひとりでに次のような唄をうたい始める．ここでようやく，兄が弟を川へ落として殺したことが明らかとなる．ひとりでにうたい出す笛とそこでうたわれた唄を羊飼いが不思議に思い，王の前へ差し出すことで，この話は大きな進展を見せる．この一件で，兄は国をイノシシの猛威から守った勇者から，卑怯な殺人者であり，なおかつ嘘をついた罪人へと一気に転落する．それと対比的に，弟の報われない死に対してわずかながら名誉を称えるためにできることとして，立派な墓が作られ，弟の遺骨が安置されることになる．

重要な点は，骨がうたう唄の中で，一連の出来事のすべての始まりとしてイノシシを振り返っている点であろう．これによって，獣による当時の深刻な国の被害状況を間接的にではあるが，再度描くことに成功しているのである．結末部で，ことの始まりへと回帰する点で，『唄う骨』における始まりの部分は，単なる導入部としてのみ捉えられるべきものではないことが分かる．この話では，「イノシシ狩り」が国の将来を左右しかねない問題として取り上げられ，王を本気にさせている．イノシシを狩ることができた者こそが一人前の男となる，儀式的な要素が根底にはあるのだろう．例えばローマでの狩りについて，次のような記述がある．

> 獲物の狩り出しは犬と網を使って行われるが，猛り立つ獣の最後の攻撃は，ひとりの男が受ける．攻撃も咆哮も耐え難い臭いも恐れずに，男は槍か短剣で，喉あるいは眉間を狙ってとどめを刺す．イノシシをしとめることはいつでも武勲と見なされる．抵抗や逆立った剛毛で傷を受けずに獲物を倒すところまでいく者は稀だった．[28]

「イノシシ狩り」は，勇敢な者の証として機能しうるのである．ただ本当は，『唄う骨』に登場する弟は，イノシシを倒すための道具と，イノシシに立ち向かう勇気，心配を拭い去る力を小人から授かっている．この場面は次のように描かれる．「この槍をおまえにあげよう．おまえはむじゃきで，いい心根の持ち主だからよ！これがあれば，大船に乗ったつもりで，イノシシにむかっていける．イノシシはおまえになにひとつ手出しできないよ」(7, S.165) 本来ならば，死をも覚悟して立ち向かわなければならない相手だが，弟は，このように小人によって身の安全が守られている状態を手に入れている．しかし，この話の場合，小人による援助は，弟に，イノシシの

対決によるものとは異なる，新たな死を与えてしまうことになる．

通常，多くのメルヒェンでは，善人として描かれる人物への援助は，その人物の最終的な成功へと繋がっていくケースが多いのだが，この話では皮肉にも，小人の援助から成しえた栄光は，兄からの嫉妬を誘発させ，かえって悲劇的な結末を生じさせていると言わざるをえない．

グリムのメルヒェンで描かれる兄弟の確執

この話の中で，もうひとつ重要であるのは，兄弟殺しが描かれていることである．王の布告をうけて良心から森へ入ることを決めた弟とは異なり，兄がイノシシ狩りを決行したその原動力は，自分自身の幸せを夢見る野心と高慢さである．兄にとって，「イノシシによる被害」と，「姫を嫁にする」ことは，つながりをもつが，前者は彼の目的ではなく手段である．なぜなら，兄にとって，国の平穏は二の次で，姫と結婚することが最も望まれるものであったからである．

『唄う骨』と他の類話を概観して，共通しているのは，兄弟間の殺人と，事実を隠蔽する行為が描かれていることである．この「兄弟殺し」というテーマに関して，カール＝ハインツ・マレは，兄弟間の確執，またそこから生じる殺意を次のように論じている．

> メルヒェンの由来がどうであろうとも，また，メルヒェンの発生時期がいつであろうとも，殺害衝動を呼び起こすものは常に妬みと不信である．この二つの特性は，昔から，そしておそらくは依然として，残酷な行為や暴力行為の動因である．[29]

メルヒェンには，兄弟間の絆が描かれていることもあるが，マレの指摘するとおり，その数を凌駕する勢いで，兄弟間の確執や争いが取り上げられていることは否定できない．さらにはそれらが由来や発生を問わず描かれているということは，語る対象としてそれが普遍的なテーマであることを証明するものである．[30]グリムのメルヒェンに限らず，兄弟姉妹間の争いごとは，いつの時代も多様に描かれてきた．ただ，兄弟の確執が，両者の死で終わるメルヒェンは稀である．その結末はどこか心苦しく，いたたまれない．

おわりに　どの目線から語るか

メルヒェンでは，三男の木偶坊や，十二人兄弟の末っ子など，善人役をつとめる者が主人公として活躍し，幸せな結末でお話が締めくくられることが多い．では，『唄う骨』の場合はどうであろうか．弟は，前半部分では，小人から邪気がないことを認められ，黒い槍を授かり，上手くイノシシを捕らえることに成功する．ここまでは主人公らしく活躍していることが見て取れる．しかし，その直後には，弟は兄によって殺されてしまう．そのため，羊飼いに骨の一部が発見され，骨が笛の吹き口へと作り変えられるまで，彼は登場する姿をもたない．もちろん，最終的には弟の胸のうちが，骨や笛を介してでありながらも語られるのであるから，弟の存在感は完全に

は失われていないのだが，弟を主人公として捉えるには，どこか違和感がある．一方の兄は，弟のように，小人から認められることもなければ，イノシシを倒すこともないが，最初から最後までお話に登場している．この点に傾注すると，ある類話が想起される．ここで，スペインで採話された類話を取り上げたい．[31]

『死骸の首』と題されるスペインのお話では，長年働いてお金を稼いだ女中が両親に会いに行こうと思う．だが，大金を持っているため一人では怖いということで，宿屋であり，髪結いの亭主が付き添うことになる．ところが髪結いの亭主は金銭欲しさに道中で女中を殺してしまう．その後，この男は「今に報いがある」という不思議な声を聞くようになる．声に，どこで？とたずねると「セビーリャで」と言う．ある日男は，宿に来た二人の紳士に，セビーリャへ連れて行って欲しいと頼まれる．途中，男は，昼食用に羊の首を買いにやらされる．それをコートの中に入れ，両耳をつかんで提げて帰る途中，警察官に尋問される．男は，二人の紳士に羊の首を買ってくるように頼まれたことを告げる．警察官は中を見せることを要求する．そこで男がコートの中から頭を取り出すと，それは昔殺した女中の首で，男がつかんでいたのは女の髪の毛だった．男は，人殺しと嘘をついた罪で，牢屋に入れられる．裁判の結果，絞首刑となる．

このように，主人公と考えられる人物は，女中を殺し，大金を奪う宿屋の亭主である．つまり，『唄う骨』の中で兄に相当する人物が，ここでは中心人物として描かれているのである．これによって，スペインの話は，悪事を働く者には，必ず報いがあることを聞き手や読者に伝える教訓話になっている．『唄う骨』においても，同様の考え方をすると，兄の悪行に対しての報いが，時間が経ってもいつかはもたらされることを語る，教訓めいた話として受け止めることが可能となる．『赤頭巾』のように，母親の言いつけを守らなかったがゆえに恐ろしい目に会うが，最終的にはハッピーエンドで締めくくられるといった，オブラートに包んだ形での教訓話ではなく，『唄う骨』では，兄の罪が罰せられる結末を明確に示すことで，悪事を働くことを非難し，それを行わないように教え諭す効果が一層濃厚にされているものと考えられる．

『唄う骨』とスペインの類話を比較した場合は，被害者自身の身体の一部によって審判がもたらされるのは共通しているが，これは，殺害された者の復讐として捉えられるものではないだろう．その理由はテクスト内にある．初版では，羊飼いが橋に差し掛かる場面の地の文が「けれども嘘はいつまでも隠し通せるものではありません．」([...] doch sollt es nicht verborgen bleiben.), (1, S.130) となっていたが，第七版を見ると，次の言葉が加筆されている．「けれども，神さまのまえには，何事も隠しおおせはしない．この悪事も明るみに出ないわけにはいかなかった．」(Weil aber vor Gott nichts verborgen bleibt, sollte auch diese schwarze Tat ans Licht kommen.), (7, S.166) ここで示されているように，『唄う骨』ではあくまでも自ずと，真実が明らかとなるのであり，死者の意志や怨念によって，隠蔽された事実が暴かれる日本の類話の例とは大きく異なる．[32]

先に確認したように，『唄う骨』には魔法昔話の要素を見ることができる．しかしながら，最も重要であると思われる結末部には，魔法の力が登場しない．『唄う骨』の結末では，国を救った者が英雄として崇拝される「聖遺物」のように，骨が埋められている．イノシシを倒すという

行動をほのめかすイノシシの存在を再度語ることが求められたのである．『唄う骨』においてイノシシ狩りが，骨の超自然的な力とは異なるもうひとつのモティーフとして重要であることは，テクストそのものの中に明記されている．それも，クライマックスで描かれる不思議な力，骨がうたう唄の中で言及されている．

»Ach, du liebes Hirtelein,	ああ，羊飼いさん
du bläst auf meinem Knöchelein,	あなたはぼくの　骨を吹く
mein Bruder hat mich erschlagen,	ぼくの兄さん　ぼくを殺した
unter der Brücke begraben,	橋の下に　ぼくを埋めた
um das wilde Schwein,	ことの起こりは　イノシシで，
für des Königs Töchterlein.« (7, S.166)	お姫さま　射とめるために

時間も空間も平面的に描かれるメルヒェンにおいて，時を遡ることは滅多にない．[33]始まりを振り返らず，先へ先へと進んでいくメルヒェンの中で，話の発端を振り返る理由とは何か．それは，話の発端が，話を開始するための単なる導入であって，話の本質とはかかわりをもたないわけではなく，他からの援助を受けてはいるものの，立派な墓に安置されることが相応しいほど，国に貢献をしたという事実が，他でもない「大型獣」，「牙動物」，「悪臭動物」，「黒色動物」でありながら，「勇敢で誇り高い動物」，「策を弄することなく，力の尽きるまで闘う獣」[34]である「イノシシ」と一騎打ちをするという行為を描くことで最も強調されるからである．

【使用テクスト】

Die Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Urfassung 1812-1814, 1. Aufl. Peter Dettmering (Hrsg.) Frankfurt am Main 1997.

Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812. Heinz Rölleke (Hrsg.) Cologny-Genève 1975.

Kinder- und Hausmärchen. Bd. 1, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen. Heinz Rölleke (Hrsg.) Stuttgart 1980.

本文中，テクストからの引用は，括弧内に版と頁数を示す．訳は，池田氏による既訳を参照させていただいた．部分的に表現を変更した箇所もある．

---

[1] 『イメージ・シンボル事典』アト・ド・フリース（山下主一郎主幹）大修館書店　1984年　75 - 76頁

[2] Hans Jörg: *Handbuch zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. Berlin 2008, S.75-76.

[3] Vgl. Uther, Hans-Jörg: *The Types of International Folktales, A Classification and Bibliography, Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson*, Helsinki 2004. S.441.

[4]ここでの罰は，中世の裁判で見られる水による審判の手法と類似点を見だすことができる．神明裁判においては，無罪であれば水に害されることはない，と考えられていた．水は，汚れたものを排除する清きものを表しているとされる．カレン・ファリントン（飯泉恵美子訳）『拷問と刑罰の歴史』河出書房新社　2004年　22 - 23頁参照．『ドイツ伝説集』を参照すると，河川は泉などと同様に神聖なる場所であり，なおかつ，畏怖すべき場所でもあることが分かる．お話によっては，樽に入れられて川へ流される例もある．
[5] Jolles, Andre: *Einfache Formen.* Tübingen 1958, S. 241f. 『メールヒェンの起源』アンドレ・ヨレス（高橋由美子訳）講談社　1999年　35頁参照．近代的な家庭像に影響を受け，グリム兄弟が，メルヒェンの雛形として，ハッピーエンド（結婚や皇位継承など）を確立したと考えられる．
[6]『世界の民話　ロートリンゲン』（小澤俊夫編　関　楠生訳）ぎょうせい　1978年　273 - 281頁
[7]『世界の民話　オーストリア』（小澤俊夫編　飯豊　道男訳）ぎょうせい　1985年　273 - 282頁
[8]『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎　日本の昔ばなし（Ⅲ）』（関　敬吾編）岩波書房　2002年　97 - 99頁．
[9]『世界の民話　パンジャブ』（小澤俊夫編　関　楠生訳）ぎょうせい　1978年　222 - 226頁．
[10]『動物裁判』池上俊一　講談社　1990年　24 - 26頁
[11]『動物裁判』，144－146頁
[12]『動物裁判』，146頁
[13]『動物裁判』，146頁
[14]『ヨーロッパ中世象徴史』ミシェル・パストゥロー（篠田勝英訳）白水社　2008年　67頁参照．
[15]『ヨーロッパ中世象徴史』，70頁参照．
[16] Es trug sich aber zu, daß der König des Landes eine große Jagd in dem Wald hielt.(7, S.81f.)
[17] ライオン，クマ，豹など各動物の位置づけの変化については，別で論ずる．
[18]『ヨーロッパ中世象徴史』，75頁参照．
[19]『人はなぜ殺すか　狩猟仮説と動物観の文明史』マット・カーミル（内田亮子訳）新曜社 166 - 169頁．
[20] Locke, John: *Some Thoughts concerning education.* New York (Oxford University Press) 2000, pp.180–181.『世界教育学選集　教育論』ジョン・ロック（梅崎光生訳）明治図書出版株式会社　1960年　142 - 143頁．
[21]『人はなぜ殺すか　狩猟仮説と動物観の文明史』，169頁．
[22] Da ließ der König bekannt machen, wer das Schwein erlegt, der sollte seine Tochter zur Gemahlin haben. (1, S.129), Endlich ließ der König bekanntmachen, wer das Wildschwein einfange oder töte, solle seine einzige Tochter zur Gemahlin haben. (7, S.165)
[23] Jesch, Tatjana: *Das Subjekt in Märchenraum und Märchenzeit.* Wien 1998, S. 143.
[24]『魔法昔話の起源』ウラジーミル・プロップ（斎藤君子訳）せりか書房　1983年　15頁．
[25] Jesch, Tatjana: *Das Subjekt in Märchenraum und Märchenzeit.* Wien 1998, S. 142.
[26] *Das Subjekt in Märchenraum und Märchenzeit.* S.143 参照．
[27] Scherf, Walter: Das Märchenlexikon. München 1995, S.1120.
[28]『ヨーロッパ中世象徴史』，68頁．
[29]『首をはねろ！』カール＝ハインツ・マレ（小川真一訳）みすず書房　1989年　40，41頁．
[30] 例えば，『かぶら』KHM146 *Die Rübe* では，巨大なかぶらを王に差し出し，大金を得た弟を妬ましく思い，後に弟を袋に入れて木に吊るすという話がある．Die Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen Bd. 3, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen.* Heinz Rölleke (Hrsg.) Stuttgart 1980.
[31]『スペイン民話』エスピノーサ（三原幸久編訳）岩波書店　1989年　123 - 127頁
[32] 日本の例では，殺害された者が骸骨の姿で現われ，言葉巧みに罪人の罪を公にする．
[33] Lüthi, Max: *Das Europäische Volksmärchen. Form und Wesen.* Bern 1947, S. 20.
[34]『ヨーロッパ中世象徴史』，72頁参照．

（つるた　りょうこ／ドイツ文学）